

市民研 news 13



People's Institute of Environment

市民環境研究所

環境塾は「闘い」を継ぐ場

石田紀郎（市民環境研究所代表理事）

被災地もそれ以外の地方も含めて、全国が震え上がった地震と津波は、余震は継続しているものの、なんとか冷静に考える段階に入りつつあり、復旧・復興のためにやらねばならないことが見えてきたと思う。しかし、地震と津波が引きがねとなっただろうが、福島原発崩壊は冷静になる段階にまで至っていない。事故発生直後にも多くの人が指摘し、予測していた燃料棒のメルトダウンが2カ月後に明らかにされ、高濃度汚染水が数万トン以上も存在することや海洋汚染、退避地区の汚染の程度などが明かにされるにつれて、余震どころか本震がまだ続いているようなものである。復旧・復興の段階などはまだまだ先のことである。もちろん、原発は復旧することはなく、まして復興することは許されない。

今年の1月29日に、当研究所の「環境塾新シリーズ・語り継ぐ」で、

原発の本質を50年近くにわたって指摘され、反原発運動の先頭に立って来られた小林圭二さんに講演をお願いした。題して「原発/虚偽宣伝の歴史」である。原子力の平和利用という最大の虚偽で始まった原発開発と設置拡大は我が国を54基も原発がある国にしてしまった。小林さんの講演録と録音が事務所にあるのでぜひ聞いていただきたい（抄録は今号のP4～5に）。

原発推進派が虚偽宣伝に使った文言として、小林さんはこの講演で、「原子力発電で電気代がただになる（1960年代後半）」「原子力発電はクリーンエネルギーである（1970年代初め）」「原子力は石油の代替エネルギー（1980年まで）」「日本のエネルギー安全保障は原発で（1980年代）」「地球温暖化対策は炭酸ガスを出さない原発で（1980年代末から）」の5つを挙げられた。そして、我々は、2011年3月11日以降に、これら

の宣伝文句が虚偽であることを、崩壊した原発の残骸、大量の放射能、それに追い出されて流浪を余儀なくされた人々の辛苦とともに再学習することになった。「地球温暖化防止のE-1」も「オール電化のE-1」もテレビの画面からは消えた。事故発生当初から、「大丈夫」「問題なし」を連発していた東大初めとする原子力村学者も、テレビ局でさえ、「とても使えない代物」として隠さざるをえなくなった。もはや、54基の原発全部が廃炉への道を歩んでもらわなくてはならないことを、「虚偽宣伝」と「虚偽解説」で多くの人々が十分に学習した。その学習は大気と土地と海洋を汚染した代償であり、これからはその償いを、膨大な資金と時間と人々の苦難とエネルギーを投じて続けなければならない。環境塾新シリーズ、は「語り継ぐ」をキーワードに始めたが、「闘いを継ぐ」場として続けたいと思う。

緊急報告

被災地支援活動報告

■仙台市若林区に派遣

3月11日午後2時46分、東日本を襲った大震災は、多くの死者を出し、未だ行方不明者も多い。助かった人々も、これからの生活を立て直していくには、まだまだ長い時間がかかる。

京都市では、消防局をはじめとする各局が、震災直後から支援に入り、活動を続けている。今回、保健福祉局の被災地支援チームとして、4月3日～8日にかけて仙台市若林区へ入ったので、その報告をする。



夜にバスで京都を出発し、12時間かけて仙台に到着した。早朝の仙台的街中は、美しいビルが建ち並び、一見したところ震災にあったとは思えない景色だった。しかし、この時点でもガスは復旧しておらず、地下鉄等の交通網も乱れたままの状態だった。まず、青葉区役所の中にある京都市現地災害対策本部に立ち寄り、その後活動場所となる若林区へ向かった。

若林区役所管内には、この時点で21カ所の避難所があり、約1800人の方々が避難されていた。活動の拠点となる若林区役所の対策本部には、全国各地から自治体の保健師や、病院の医療チーム、こころのケアチームなどが支援に来ており、数十人という多くの方が朝のミーティングに参加していた。若林区役所の保健センターのスタッフは、自らも被災者であるにもかかわらず、泊まり込みで支

援者のコーディネートをしておられた。私たちは、割り当てられた避難所に出向き、避難者の方々の健康相談や血圧測定、感染防止の指導、こころのケアなどを行った。

若林区役所管内では、海岸線から3km圏内の地域が、津波で壊滅的な被害を受けており、そこに住んでおられたほとんどの方々が避難されていた。

この時期、昼間は避難所から仕事に出かけたり、家の様子を見に行ったりする人が多く、私たちの活動時間である昼間に避難所に残っているのは、お年寄りや子ども達が大半だった。夜になると、多くの方が避難所に戻って来られ、不安な夜を過ごしておられたと聞いている。そのような、本当に必要な部分への支援ができなかったことは、組織的な問題はあるにしても、後に反省点として残った点だった。

避難所では、水道と電気は通っており、自衛隊による食事提供はされていたものの、避難所生活が1ヵ月近くに及ぶ中、どの人にも疲れが出てきており、まだ寒い時期でもあったため、咳や発熱する方も多く見られた。また、避難所全体の衛生状態も、良いとは言えない状態だった。



この頃は、仮設住宅や各種支援制度などの説明会がやっと始まったばかりで、まだまだ今後の生活のメドを立てるには至らない状況だった。

■今後の支援にどう生かすか

短い派遣期間であり、避難所の方と顔なじみになったところで、次のチームと交代するというスケジュールだったので、どのくらい役に立ったのかは分からないが、被災者の方々の健康状態を確認し、お話を聞き、遠い京都からも支援しているという気持ちを伝えることはできたかと思う。できればもう少し長期の派遣であればという想いを残して帰ってきた。

神戸震災のときと違い、東北は遠い。支援に行きたくてもいけない人はたくさんいると思う。仕事上このような機会をいただけて、被災地の状況を体験させてもらったことに感謝したい。

津波の被害のあった荒浜地区の風景は、これが現実であることが信じ難く、言葉を失うというのはこういうことを言うのだと思った。その壊滅した地域の先には、静かな青い海が広がっており、何とも言えない気持ちになった。

地震・津波・そして原発と解決の見えない状況ではあるが、今回被災地で経験したことを今後の支援にどのように生かしていけるかが課題だと思っている。

緊急
提言

内閣総理大臣 菅直人 殿

福島原発崩壊による放射能汚染は深刻である。言うまでもないが、公害や環境破壊の被害はまず弱者である子供と女性に発生し、その人々への対策が政治や社会の意識を反映している。これは、遅れる国の対策と沈黙を続ける研究者に抗して関西の地からの提言である。

2011年4月18日

提言書

内閣総理大臣
菅直人殿

東北沖に起こった巨大な地震と津波の激甚災害、その対策に尽力されていることに敬意を表します。その上、福島原発に空前の放射能拡散の巨大惨事が発生し、日夜、苦慮、対策に奔走されておられるご苦労とご心痛を拝察申し上げます。

私どもは多年、原発の技術的危険性と事故発生による放射能の恐怖を指摘し、原発に依存しない社会をと願ってきました。今回の惨事には言葉も出ません。「安全神話」にすべてをゆだね、疑問と批判を無視して原発推進してきたことに対しては機会をあらためて論ずることとして、当面の緊急対策について私たちの危惧と提言をさせていただきます。

すでに信じがたいほどの放射能が拡散しています。その上、事故原発の状況も不透明、収束の見通しも立っておらず、今後も異常事態の重なる危険はいまだ消えていないようです。この状況の中で、近隣住民への放射線被曝の不安解消への真剣で具体的対策を強める必要があります。とくに子供と妊婦には慎重な配慮と施策が求められています。

(1) 現在、公表されている大気中の放射線量や甲状腺の内部被曝量は恐るべき高水準にある。30km圏外飯館村や川俣町、いわき市な

どでも、その現状は危惧ですますことのできない高レベルの汚染である。まず緊急対策として幼児・妊婦の疎開に政府は責任をとり、そのために経済的支援を用意すべきである。

(2) 学校敷地、通学路、公園など子供の生活空間・敷地については、早急なる除染の作業を行い、被害軽減の対策を進めることが必要である。

以上提言するに当って、現状の放射能汚染の深刻さに注意を重ねて喚起しておきたいと思います。従来より、放射能の危険から従業員と公衆を守るため、法令によって、「管理区域」を定め、事業者による業務遂行上の必要のある者以外の立ち入りを禁止させています。管理区域は「3ヶ月につき1.3mSVを超えるおそれのある区域」と定められていますが、時間当たりになると0.6 μ SVとなります。公表されている大気中の放射線量だけに限っても広範囲の地域が長期にわたって、高濃度の汚染です。たとえば浪江町(赤字木)では25.3 μ SV/h(4月16日現在)ですから、規制レベルの実に40倍を超えています。遠く福島(1.87 μ SV/h)、郡山(1.82 μ SV/h)でも約3倍の高水準の汚染です。妊婦や幼児がその地域に生活し続けている事実が目し、深く憂慮いたします。

現実的政策には多くの困難のあることは承知しておりますが、妊

婦と幼児への対策として、高濃度汚染地域から可及的速やかに実施されることを、重ね重ね強く提言したいと思います。

原発事故と今後を憂うる
サイエンティスト有志

石田 紀郎(元京都大学教授 現市民環境研究所代表理事)

今中 哲二(京都大学原子炉実験所助教)

荻野 晃也(元京都大学講師 現電磁波環境研究所主宰)

海老沢 徹(元京都大学原子炉実験所助教)

川合 仁(現代医学研究所代表 医師)

川野 眞治(元京都大学原子炉実験所助教)

小出 裕章(京都大学原子炉実験所助教)

小林 圭二(元京都大学原子炉実験所講師)

柴田 俊忍(京都大学名誉教授(機械工学))

高月 紘(京都大学名誉教授 環境保全学)

植田 劭(元京都精華大学教授 使い捨て時代を考える会)

中地 重晴(熊本学園大学教授 環境監視研究所代表)

原田 正純(元熊本学園大学教授 水俣学 医師)

松久 寛(京都大学教授 機械理工学)

緊急寄稿

健全な知性を取り戻そう

植田 勲 (使い捨て時代を考える会顧問)

6月の野山は美しい。緑の広がる舞台に小鳥の音が流れる。田植えのすんだ水田には蛙の歌がひびく。平和そのものであるが、平和すぎる景色に不気味さがただよう。

郡山市から車を走らせて1時間余、飯館村に入って風景は一変した。山の穏やかな斜面に緑も豊かであるが、田畑は耕されている様子はない。粗起しのすんだ田は水も引き入れられず、まばらな雑草の緑が寂しさを引き立てている。作付が禁止されているからである。

人かげも見えない。この異様さに村人の苦悩が込められている。福島第一原発事故の故である。巨大なエネルギーの支配に傲慢を極めた科学技術の犯罪の故である。

その風景を見ながら、別の場所の異様さを思い出していた。何年ぶりであろうか。京大のキャンパスを5月に訪れたときのことである。土曜日のこととはいえ、学生の姿もまばらであったが、立看板一つ見かけない。平和であるが、活気が感じられない。過酷な大事故が起こり、世の中がひっくりかえるような大騒ぎをしている真最

中であるのにどうしたことなのだろう。

科学者であることをやめ、京大を離れて30余年になるが、昔はもっと活気があった。学問・思想の自由や科学者の良心などをめぐって学生たちと熱い議論をしていたものである。世の中がすっかり変わったということなのであろうが、これで健全なのだろうか。

今回の原発事故について、マスメディアには原子力村御用達の面々は登場するが、大学の研究者サイドからの発言はほとんど聞こえてこない。そのような中で、私たちの提言書(前ページに掲載)は珍しいことであったのか、ちょっとした話題となった。放射能の高濃度汚染地域に妊婦や子供が放置されている現実を無視できぬ思いに発する友人たちとの連署であった。

社会的責任の自覚を欠き、良心を積み残す科学は「ツミトガ罪科の学」である。高度な専門性を誇り、タコ壺にしがみつき、貪欲に研究費をねだる科学者は犯罪に加担することになるだろう。科学技

術の進歩は危険であり、巨大化すればするほど専門バカの独壇場と化してしまう。「想定外」を連発した専門家の姿に、狭い原子力村の御用を勤める以外の見識を持たない罪深さが露呈していた。科学技術が巨大化し。精密化すればするほどタコ壺化がすすみ、門外漢や素人の批判を排除した。想定可能なことを「想定外」と無視して来た結果、悲劇となった。

健全な知性を取り戻すことである。science(知)は総合化・普遍化によってcon・science(良心)とつながっているべきなのである。科学者であることはやめたが、サイエンティストではありたいと、私は願いつづけている。そのようなサイエンスを大切にするためには広い視野、健全な社会性が必要不可欠なのである。

大学関係者と市民がもっともつと交流を深める道を拓きたいと思う。異様な平和から大学キャンパスが脱却することを期待したい。そのことが、脱原発・公害を許さない社会への入口のように思うからである。

環境塾

<これまでのまとめ?>

前号に引き続き、「環境塾」一覧の第2回です(講演者の肩書きは当時のものです)。

【環境塾第12回】

野生動物とどうつきあうか～鳥獣被害を考える

- ①野生動物とつきあうとは◆高柳敦 京大農学研究科(2008.2.2)
- ②二ホンザルによる被害の現状と対策◆大井徹 森林総研関西支所

生物多様性研究グループ

- (2008.2.9)
- ③農山村社会は野生動物被害をどう防いでいるか◆鹿取悦子 南丹市美山町在住(2008.2.16)

【三二環境塾第1回】

進化・発展する鴨川保全条例に
◆田中真澄 府民会議委員
(2008.1.23)

【三二環境塾第2回】

地球温暖化をアラスカで感じる
◆服部正法 毎日新聞大津支局
(2008.3.18)

【三二環境塾第3回】

裁判員制度とは◆金川琢郎 弁護士

士(2008.7.24)

【三二環境塾第4回】

焼畑「山カブラ」を体験◆火野山ひろば(2008.7/24,25,8/10)

【三二環境塾第5回】

私のアフガン◆荒野一夫 ベシヤワール会(2009.1.31)

【環境塾第13回】

①町の米屋として一言◆出口洋司でぐち米穀店(2009.2.14)

②田んぼと米の物語◆柴田一義 シバタブラセールファーム(2009.2.21)

③いつまでもあると思うな親と米
◆植田勲 使い捨て時代を考える

市民研の仲間たち【環境監視研究所】

市民研に同居します 環境監視研究所

4月からお世話になっています。遅ればせながら、同居のごあいさつをさせていただきます。

ご存知の方も多いと思いますが、環境監視研究所は、1988年3月に市民が安心して依頼できる環境調査機関として、医療法人南労会の一部門として設立されました。ゴルフ場排水の環境汚染問題、農薬、ダイオキシン問題、廃棄物最終処分場の環境汚染、阪神大震災時のアスベスト汚染などに取り組んできました。23年間にわたり、社会に問題提起する調査活動や若手研究者の育成のための琵琶湖市民大学の開催などにも取り組んできました。

中地が昨年4月から熊本学園大学社会福祉学部の専任教員として赴任したこと。及び母体の医療法人の経営悪化などを理由に、今年3月末で医療法人南労会の分析室が閉鎖され、事務所の移転を余儀なくされました。

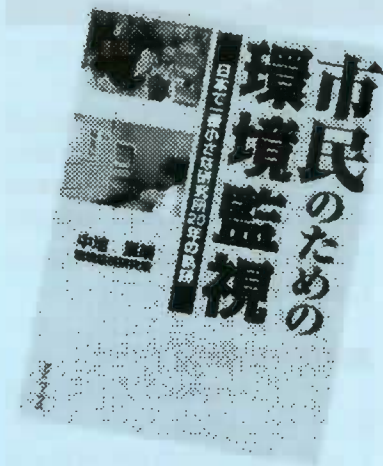
この20年間余の活動を通じ、環境監視研究所の存在意義を再認識し、今後も活動を継続していきたいと考

え、4月から市民環境研究所に事務所を移させていただくことになりました。資料の保管や事務スペースを使用させていただくため、応分の負担として、事務所の家賃も些少ですが、負担させていただきます。

心機一転、市民団体・NGOとして再出発します。当面は、会報「環境監視」の発行を続けながら、淀川水系の水質を調べる会、琵琶湖市民大学などの若手を育てる活動と、香川県豊島の不法投棄産廃の無害化处理や大阪府能勢のダイオキシン汚染問題の解決に向けた取り組みへの協力など、各地の市民団体の活動の支援を続けていきたいと考えています。

さらに、3月の東日本大震災の発生で、アスベストや放射能汚染問題などかつての経験を生かし、被災地の復興への協力など、新たな取り組みも行っていきたいと考えています。スタッフが常駐するわけではありませんが、市民環境研究所と新たな連携も模索したいと思いますので、よろしく願います。

12



(代表：中地 重晴)

会顧問 (2009.2.28)

【三二環境誌第6回】

若者が見たカザフスタン◆加藤りよ・湯谷啓明 京大農学部4回生 (2009.10.22)

【環境誌第14回】

沖縄の今を考える

①沖縄の農とくらしの今◆夏目ちえ 有限会社真南風代表 (2010.4.17)

②沖縄から何を見るのか◆大湾宗則 京都沖縄県人会会長 (2010.4.24)

(まとめ：和泉賀津子)

市民環境研究所 ホームページを要チェック

長い間更新できていなかった「市民研ホームページ」ですが、今号Book Reviewに執筆いただいた越智正樹さんのご協力により、少しずつではありますがコンテンツもふえてきました。

特に、今回の東日本大震災と福島原発事故については、当会会員が推薦するサイトへのリンク集がおすすめです。

垂れ流し状態のマスコミに頼らないで、より実相に迫る情報を得ることができます。

ぜひ、ご活用ください。

<http://www13.plala.or.jp/npo-pie/>

となって、エネルギー問題が社会的にも政治的にも話題になって、80年代に登場してきた宣伝文句が「日本のエネルギー保障は原発で」というものです。当時日本にはウラン鉱山として「人形峠」があったんですが、基本的には全部輸入なんです。それなのに、原発は準国産エネルギーと称して、それを中心としたエネルギーの多様化を確立していくということがエネルギー政策として謳われましたが、実際の中身は原発最優先の政策となっているわけです。

その時代に、1986年ですが、旧ソビエト（現在のウクライナ）のチェルノブイリで原発の重大事故が起こりました。ところがチェルノブイリ原発（黒煙炉）と、日本の原発とはタイプが違うため、推進派は、日本の軽水炉はかえって安全で、暴走は起こりえない。他人事のような形で、だから日本は相変わらずやるんだとあって、一時事故は運転員の判断ミス、誤操作で起こったことが原因だと言われたことがありました。

なんら、教訓として受け止めない。そこへ行くと欧米は、タイプが違っても、一度重大事故が起こったら破滅的な被害を被るんだということをおおきな教訓として学んでいるわけです。この対照はなんだろう、という気がつくづくします。

■地球温暖化対策は原発で

「地球温暖化対策は炭酸ガスを出さない原発で」という、これは今に続いている宣伝文句ですね。でも、これはちょっと考えればまやかしだとすぐ分かる。それが、今は毎日のようにテレビに星野仙一が出て来て宣伝しているという時代になっているわけです。

地球温暖化がほんとうに人為的に放出された炭酸ガスの濃度の増加によるものなのかどうか、という科学論争が現在も続いています。ここではペンディングにしておき

ますが、人為的な炭酸ガスの放出が温暖化の少なくとも一つの原因であるとしても、それじゃあ炭酸ガスが悪いのかと言うとそうではない。そもそも炭酸ガスが悪者なのではなくて、それを大量に放出する状況、大量生産・大量消費によってたくさんのエネルギーを使った結果であるわけですね。

原発の推進側は、最初は「原発は炭酸ガスを出さない」とだけしか言っていなかったのですが、最近は反原発派にこづかれて、「発電時に炭酸ガスを出さない」という言い方に変えました。発電時に炭酸ガスを出すか、出さないかという選択の問題ではないことは誰でも分かることだろうと思います。エネルギー多消費社会構造を変えない限りは変わりようがない。

炭酸ガスが人間の活動の廃棄物という考え方をとるならば、炭酸ガスはむしろ植物の栄養源ですから、なくてはならないものであって、廃棄物という観点に立っても、その中では一番無害なものと言えます。火力をやめて原発を作るとするのは、もっとも無害な廃棄物を、もっとも有害な放射性廃棄物に代えるという行為であって、本末転倒なわけですね。こういう自明な矛盾を、なんのためらいもなく素通りしているという、マスメディアを使った推進サイドの大宣伝が現在の状況です。

かつてナチスが、「ウソも百編言えば誠になる」と言った、あの状況が、「地球温暖化対策に原発を」という状況に再現されているのではないか、空恐ろしい気持ちにならざるを得ない。

ついでに付け加えますと、私は原発はエネルギー消費を増やすと思います。それは大きく二つの理由があるわけです。一つは、これから造る原発は大体一基が130から150万キロワットという巨大な出力になっています。そんなに巨大な発電設備を造ろうと思ったら、



それが使えるだけの需要がないといけな。大量需要の状況を必要とするということですね。もう一つは、原発は需要に合わせた出力の調整ができない。いったん動き始めると、次の定期検査までずっとフルパワーで動き続けるしかないんですね。当然のことながら、昼はたくさん使っても夜はその半分とか3分の1くらいしか使わない。夏はたくさん使っても、春と秋はその半分以下だという現状では、余っているわけです。

それでなにを考え出したかというと、都会ではオール電化で、夜間の電力を安くするから夜の電力利用を奨励する。工場なんかも夜間の工場操業を増やしていく。そうすると、そこで働く労働者は、昼間働く人と同じような生活を夜するわけです。そうすると、眠っているといらないエネルギーが、夜間も人間社会が動くということになると、夜のエネルギー消費が新たに創出されるわけです。エネルギー消費というのは必ずしも電気ばかりではないから、他の化石燃料も当然増加していくわけです。

そういうわけで、電力の中で原発のウェイトが大きい状況は、エネルギーの多消費を奨励する状況をもたらすのではないかとこのことを、非常に危惧しています。

これは、もう、地球の温暖化対策どころではないのではないかと思います。

（「夢の原子炉」と呼ばれる高速増殖炉の虚偽については、紙数の関係で割愛した）

里の前
だより

今だからこそ 市民型福祉を 考えたい

石田紀郎

月1回程度の間隔で開催している環境塾特別編「語り継ぐー20世紀から未来へー」は好評のうちに第4回を終了した。このシリーズは20世紀後半から現在までの40年も50年もの長き間、それぞれの分野で、京都の地で先頭を走り続けてきた方々に講師をお願いしている。今回の講師は、「市民型福祉の創造」をめざして来られた、NPO法人・ハーモニーきょうとの代表である長田侃士さんであった。

長田さんは1987年に京都福祉生活協同組合準備会を結成以来、一貫して住民主体の社会福祉の在り様を模索し、2000年に「ハーモニーきょうと」を設立された。講演の内容は次号で紹介する予定である(当日の講

演録音を聞きたい方には貸出ししますのでご連絡ください)。中味の濃い話で、質問も多く、充実した塾であったが、聴衆が少なく、講師には申し訳なかった。高齢化社会の中で、もっとも関心のあるテーマである。

参加者の少なかった理由は、課題や講師にあるのではなく、2011年の5月という時期にあると思う。3月11日の東北震災と福島原発が重くのしかかり、人々の頭と心の大部分を占めている。毎朝目覚めるときには、福島原発が爆発していないか、昨日よりも事態は悪化していないかとビクビクしながらニュースを見る。震災からの復興と原発社会からの脱出が最大の課題となった我が国の毎日となり、福祉と聞いても、しばらくガマンし、置いておかざるを得ない心境だから、人々の集まりが少なかったのだろうと思っている。

しかし、大震災や原発被害地域の情報は、まさに長田さんが実践実証されてきた、市民型福祉が根強く力を持っていればこの大難儀を乗り越えられる社会基盤になることを教えてくれる。いつかこの課題の塾を開催し、長田さんに再度登場願いたいと思っている。

BOOK REVIEW

「海に沈んだ町」

三崎亜記著・白石ちえこ写真
(2011年・朝日新聞出版社)

かつては憧れの的だったが、今はその面影もなく航行する「大型団地船」。外部との接触が禁止され、生観観察の対象となった「ニュータウン保護区」。5年前から夜が居座り続けている町で、起き続ける者と眠り続ける者。局所的に「海」に襲われ沈んでしまった、捨てたはずの内陸の故郷……。

三崎亜記は、1970年、福岡県生まれの小説作家である。地方公務員として勤めていた34歳の時にデビューし、後に専業作家となった。おそ

らく、公務員時代に直面したやるせない現実が、創作の根幹にあるのだろう。三崎の作品は、極めてシュールかつユニークでありながら、生々しい現実へと锚を下ろし続けている。

その作品群において、頻繁に用いられているテーマが、「町」および「喪失との接触」である。「失われた町」(2006年、集英社)では、1つの町の住民が忽然と消滅する奇怪な現象が生じる。しかもこの現象は、予測不能なたちで伝播する。物語の中核にあるのは、逆らい難いこの現象と向き合う諸々の姿だ。「失われたものへの痕しなど存在しない。人は皆欠落した断面の手触りを日々確かめながら、それを日常として歩き続けるしかないのだから」。

本書が描く9つのエピソードも、オムニバスながらどこかで繋がり、1つ

の現実を浮かび上がらせている。漂流する喪失の欠片と接触したとき、人は懐古とか希望といったふうには表象し得

ないものを経験するのではないか。

本書における想像力の自由さと現実への投錨とから、誰もが独自に10個目のエピソードを思い描くことが許されるだろう。

越智正樹(京都大学大学院文学研究科COE研究員)



【年会費(1口)】

- 正会員(1口以上)
個人: 5,000円、学生: 2,500円
団体: 20,000円
- 賛助会員(3口以上)
個人: 1,000円、団体: 10,000円

NPO法人 市民環境研究所
〒606-8227 京都市左京区田中里ノ前21 石川ビル305
Tel & Fax 075-711-4832
[E-mail] pie@zpost.plala.or.jp
<http://www.13.plala.or.jp/npo-pie/index.htm>